

先生なら、 どうしますか？

教師は、生徒の「どうあるべきか、どう生きていくか」という答えが1つではない問いに、生徒とともに日々向き合う。教師としての指導観を問われた「あの瞬間」を、当事者の教師が振り返る。

経済的な理由で
進学を断念した生徒。
「ここがいいです」
忘れられないあの表情

岩手県立葛巻高校 抱石鉄也

だきいし・つや ● 同校に赴任して3年目。英語科。
予測困難な VUCA の時代を生き抜くために、
「dare mighty things(あえて困難に挑戦を)」
「ワクワクに突き進もう」を、常に生徒に伝えている。

20代の頃、過疎地の小規模校で担任として3年間かかわった女子生徒のAさんは、休み時間にも数学と理科の勉強に取り組み、模擬試験では常に優秀な成績を収めていました。しかし、Aさんの保護者は、経済的な理由から娘の進学には前向きではありませんでした。私はAさんと保護者に奨学金制度を紹介し、Aさん本人には「〇〇大学ではこんな研究ができるよ」などと大学の情報を伝え、進学意欲を高めようとした。その度にAさんは「大学、行けたらいいですね」と、自分の意志を曖昧にした言葉を口にしました。きっと私を失望させたくなかったのでしょう。私も、本人に希望進路をはっきりと確認することを先延ばしにしました。答えを求めることで、進学という選択肢が消えることを恐れていたのだと思います。

3年次6月の三者面談で、Aさんはついに「勉強は好きだけど、きょうだいも多いので就職します」と、進路を明言しました。Aさんの隣に座る母親の傍らには小さな妹がいました。翌日からAさんの休み時間の勉強は、就職試験対策に変わりました。

数日後、「先生……」と声をかけてきたAさんの手には、地元大手企業の求人票がありました。Aさんは自らの思いに踏ん切りをつけるような表情で言いました。「ここがいいです」。私は「分かった」と言いました。それ以外の言葉が見つかりませんでした。そして秋口に就職の内定を獲得したAさんは、数学と理科の勉強を再開。センター試験受験者を対象にした補習にも、自ら希望して参加していました。

卒業から2か月後、Aさんが接客担当になったことを知った私は、彼女の職場を訪ねました。生き生きと働くAさんの姿を見て安心したかったのかもしれませんが、Aさんを見つけた私は、「元気か？」と尋ねました。Aさんは笑顔で「はい、頑張っています」と答え、私に言いました。「先生、いろいろ頑張ってくれて、ありがとうございます」。無力だった私に、「ありがとうございます」。心の奥に刺さる言葉でした。

あれから約20年が経ち、当時の生徒や保護者に対する私のかかわり方の問題点が見えるようになりました。生徒の希望をすべてかなえてあげられるわけではもちろんないですが、だからと言って「仕方がなかった」で済ませたくはありません。やり直すことができない3年間を生徒とともに歩むのだからこそ、教師として過去の痛みを忘れず、次につなぎ続けたい。私にとってAさんとの時間は、一生忘れられない痛みなのです。

もしも20年前に時間を戻すことができたのなら、抱石先生はAさん、そして保護者とどのようにかかわるのか。本エピソードの詳細と抱石先生のその後の歩みを描いたウェブオリジナル記事を、ぜひご覧ください。



<https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article17751/>

